

# ニカメイガ情報第1号（水稻）

令和8年7月3日  
愛知県農業総合試験場  
環境基盤研究部病害虫防除室

**第一世代幼虫による心枯れ被害が目立つほ場があります。  
第二世代幼虫による被害に注意しましょう。**

## 1 発生状況

6月下旬の巡回調査（県内91ほ場調査）において、ニカメイガによる被害株率は0.38%（平年0.20%、前年0.45%）で、過去10年間で4番目に高い状況でした。

また、県内各地に設置した予察灯では、5月から6月にかけて越冬世代成虫が各地で誘殺されており、誘殺数が一部地域でやや多い状況です。

このため、7月以降に第一世代成虫の発生が多くなる可能性がありますので、近年被害の多い地域では、第二世代幼虫による被害に注意しましょう。

## 2 ニカメイガについて

越冬世代成虫は田植え後のイネに産卵し、ふ化した第一世代幼虫がイネの茎内に侵入し食害します（図1、2）。被害にあった茎は葉鞘褐変を起し、食害量が多い場合は枯死し、心枯れを生じさせます（図3）。

第一世代成虫もイネに産卵し、ふ化した第二世代幼虫がイネを食害します。出穂期以降の被害では、白穂を発生させ収量に影響します（図4）。

## 3 防除対策

ニカメイガは発蛾最盛期（成虫発生ピーク）の数日後～7日後の薬剤散布（粒剤は発蛾最盛期）が効果的です。しかし、ニカメイガは断続的に成虫の発生が続く傾向があるため、成虫発生のピークを捉えることが難しいです。このため、ほ場での発生状況（成虫の発生が目立つ頃）や予察灯の誘殺数（あいち病害虫情報 調査データ）、過去の発生消長（図5）などを参考に、成虫の発生が増えてきた時期にパダンSG水溶剤（収穫21日前まで）などで防除しましょう。

なお、近年の予察灯（弥富市）における誘殺数は、7月中旬～下旬頃から増加する傾向です（図5）。また、令和7年は、8月下旬に誘殺数がさらに急増しましたので、遅い作型では8月以降の発生も注意しましょう（図6）。



図1 ニカメイガ成虫



図2 幼虫が茎内を食害する



図3 幼虫の食害による茎の心枯れ（一部の茎が枯れて変色）



図4 白穂被害

